跡見学園女子大学国文学科報　第十三号（昭和六十年三月十八日）

鏡花『高野聖』論

――聖化された存在への夢――

千原ユキ子

『高野聖』という物語の中には、さまざまな事物が登場する。蛇・山蛭・水・女人・白痴などである。これらは一つ一つ独自の意味を持っている。そして宗朝の道行きは、通過儀礼の形を取っている。女人と白痴の住んでいる山奥は儀式を行う中心地である。つまり神聖な場所――聖域である。女人は宗朝を「崖の水」（十二）の所まで導き、谷川の水を宗朝に浴びせる。

儀礼において、聖なるものに近づくためには媒介となるものを必要とする時がある。例えば霊と人の間を仲介するのは霊媒である。『高野聖』では、「水」がその媒介となっている。

水は古来から祭・行事に利用されてきた。例えば、正月の若水汲み、禊ぎの儀式などである。身体に罪や汚れのある時、又は神事に携わる前に、水で身体を洗い清めることを「禊ぎ」と言う。禊ぎの起源は『古事記』において伊弉冉尊を求めて黄泉国（死者の国）へ行った伊弉諾尊が現世に帰ってから筑紫の日向の小門の橘の檍原で身についた汚れを洗ったことに初まる。と言われている。

宗朝の水浴はまさしく「禊ぎ」の儀式に他ならない。表面的には蛭に血を吸われたためにできた疵の痛みを癒すために、水に浸ったのだが、その背後には宗朝自身の中の穢れを、不浄な部分を祓うために、そして古い存在を捨て去り、新しい存在になるためという「再生」の意味が隠されている。

新しい存在になる――再生は、今までの自分を失うということである。つまり一時的にせよ自己の存在の消失――死を意味しているだろう。

水には深さがある。湖や海の底を覗き込むと、時には吸い込まれるような錯覚を起こすことがある。それは水は深くなればなるほど暗さを増し、暗さは水底を隠してしまうからである。水底は隠されてしまうため、水はどこまでも続いているように思われる。底無しの、無限の深さを感じることになる。無限の深さは光の無い闇を強

調し、そこに吸い込まれて行く気持になる。同時に果てることのない奈落の底へ落ちていく恐怖が生じて来る。そして恐怖から死へと繋がって行く。

『高野聖』において、宗朝が水と関わるのは峠の旧道に入る前、麓の茶屋に立ち寄った時が一番最初である。咽が渇いた宗朝は、茶店の前の「小流れ」（三）の水を飲もうとして、その時これは流行病が出ている辻という村の方から流れて来た川の水ではないかと心配して、茶店の女に尋ねる。そしてそれを聞きつけた嫌な富山の薬売りに「坊主になって矢張り生命は欲しいのかね」（同）とからかわれるのだが、要するに宗朝はその川の水が死に繋がる水ではないか。という恐怖に捕われているのである。

水は生命を己れの深みの中へと引き摺り込み、そして物体を分解して己れと同化させてしまう。それは生命の死を象徴している。水は緩かで、それでいて常に流れ、何ものかを絶えず崩壊させている。

宗朝は水の中へ浸り、意識がいつの間にか遠のいていく。しかもその水は「身に染みる」（十五）のである。宗朝は水の中に溶け込み同化しようとしている。死にゆく状態になっていく。身体だけでなく、彼の意識も遠いていきながら溶解していく。

しかし「恐怖」という力だけでは、人は水の中に入ろうとはしないだろう。もう一つ別の力が必要である。人が逃れようとする死と恐怖でなく、人が求めてやまない生と歓喜に基づいた力が必要である。

水は暗く深い印象と同時に、非常に明るく爽やかな印象をも人に与える。むしろこちらの印象の方が不断は強い。明るい日射しの中の流れる小川は回りのすべての風景を生き生きと躍動させ、新鮮に見せる力を持っている。水はすべての生命が甦える源動力でもある。

そして澄んだ水から人は「純粋」なイメージを思い浮かべる。水の持つ純粋性は、すべての穢れを洗い清めることに、浄化へと導かれていく。又明るく爽やかな水は、すべてを新しく活動的に見せる。

水は死んだ生命を蘇らせる。再生する力を持っている。しかもただ単に再生させるだけでなく、疲弊し汚れた生命を浄化する作用を併せ持っている。水はすべてのものに生命力を与え、蘇生させる。水は死と同時に生を運び、生命のすべてを生み出し育む大いなる豊かさと優しさを持っている。水が儀式に使用されるのは当然とも言える。

再生して新しい自己を得ることは、結果的に「穢れ」や「罪」を祓うことになるだろう。水が穢れや汚れを洗い流すものとして捉えられることは当然であろう。しかし穢れという概念は実体のあるものではない。水は抽象的な、形の無い穢れを祓うための役割の前に、即物的な現象に附随する現実的な役割を持っているはずである。

水はすべての生命のすべてを生み出してきた。人間という種族全体の元々の起源も水の中であると言える。又、水は人の誕生の媒介をなす羊水に譬えることができる。母親の胎内にいる赤ん坊を保護している羊水から与えられるイメージは、暖かくそして優しいもの

である。

女人が宗朝に掛けてくれる水は、「骨に通って冷たい」（十五）水ではない。宗朝はこう話している。「暑い時分ぢゃが、理窟をいふと怎うではあるまい、私の血が沸いたせゐか、婦人の温気か、手で洗ってくれる水が可い工合に身に染みる」（同）と。宗朝にとってこの谷川の水は、茶店の前の水のような、恐怖の対象ではない。自分に優しく暖かく触れてくれる水は、愛情の対象と言えるだろう。そして水の中にいる内に宗朝は、「花びらの中に包まれたやう」（同）に感じる。これはまさに母親の胎内において羊水に包まれている赤ん坊の状態である。花びらのことを宗朝はこうも言っている。「不思議な、結構な薫のする暖い花」（十五）と。その中に「柔かに包まれ」（同）たのである。しかも「其の心地の得もいはれなさで、眼気がさしたでもあるまいが、うと〳〵する」（同）のである。つまり意識が有るか無いか、半分起きて半分寝ているような状態となる。これは死にゆく状態であると同時に、誕生する前、胎児が母胎の羊水に包まれて浮游する状態と似ているのではないだろうか。宗朝は水へ、羊水へと母の胎内へと戻っていったのである。

水が胎児を守り誕生の媒介をなす羊水に譬えられるならば、さらに考えを進めて水のことを母乳と譬えてもおかしくないはずだ。フランスの哲学者G・バシュラール氏は、「水はすべて乳（母乳）でありあらゆる幸福な飲料である。」[注1]とした。母乳は、生まれ出た赤ん坊に栄養を与え成長させる。母乳は生命を育む水と言ってもおかしくないだろう。

宗朝が浴びた水は母乳であり、羊水でもあると言える。暖かく、優しく、柔かい、人を安心させるものである。それ故「冷たい」のではなく「暖かい」水なのだ。人を冷たく拒否するのではなく、人を暖かく受け入れ包み込むのだ。ここから母親を、そして母の持つ母性を思い起こすことができる。水は己れの内に母性的特徴を有している。

宗朝は水の中へ入った。これは羊水の中へすなわち母の胎内へ戻ったと考えられる。つまり大人から子供へ、さらに子供から赤ん坊へ胎児へと若返ったと言える。ここから水は若返りの力をも持っていると言えるだろう。

伝説・伝承などには飲むと若返るという若返りの水のことが伝えられているものがある。年老いては若返り新たな人生を送るということは、再生であり、その個体の連続した生、永生を意味している。古代の人々はここに蛇の脱皮を当て嵌めてみたのである。

『高野聖』の中で蛇は幾度となく宗朝の前に姿を現わす。「両方の叢に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡して居る」（六）のであり、又「半分に引切ってある胴から尾ばかり」（同）という時もある。

『高野聖』に限らず、蛇は多くの伝説・神話に登場している。蛇は中国の神話では、天地開拓の創世神であり、人間の祖である。キリスト教においては、蛇は諸悪の源、原罪を作ったものとして邪悪の権化と見做されている。どちらにしても、これは性に対する考えが蛇の形をとって示されているのであり、蛇の問題は「性」の問題

とも言える。

蛇は性の象徴として表現されることが多い。特にその外形から男性の性が感じられる。男性の性は時によって理性を超えた狂暴さを見せる。そしてそこには必ず罪悪を伴う。狂暴な性は又不浄のものとしても見られる。

それ故、宗朝は蛇と出会った時、なるべく遠くへ遠くへと避けている。宗朝は蛇を恐れている。「生得大嫌、嫌いといふより恐怖いのでな。」(六)と言う。

性は理性を超えた狂暴さを持っている。そしてそこには罪悪と不浄が伴う。それは人間が余計な手出しをしてはいけないもの、手を触れるべきではない、触れてはいけないものである。しかし性というのは総ての人間が持っているものである。宗朝も自分自身の中に持っているはずである。それ故、触れてはいけない部分に触れてしまう可能性は高い。だからこそ、その危険を恐怖によって回避しようとしているのではないだろうか。

しかし、性は人間の出産、つまり人類の存続と密接な関係があり、罪悪のものとして拒否し続けることはできない。性を全面的に否定することは、人間の存在の否定に繋がる。

荒れ狂う性を取り抑えられるものは、男の性自身である。つまり性の邪悪な面を断ち、それを子を生み殖やすという善事の根源として新しく出発させられるのも性自身である。

性を罪悪視し人間存在の否定をするのではなく、性の邪悪を面を切り捨て、性を正当な位置、つまり性を人間存在の根底にあることを認める位置に直そうとするのである。

性を回避するだけではいつまでも罪悪なものであり、不浄のものでしかない。恐怖の対象として蛇を見、それから自己を遠ざけようとしていても、性を正当化させるためには性に近づかなくてはならない。宗朝は蛇を跨ぎ越し、避けながら山の奥へ奥へと進んで行く。それは性の中の不浄な部分を避け、性の根源に到達する過程を示すものではないだろうか。そしてそれは性の不浄の回避だけでなく、不浄の部分を昇華し浄化させる過程(儀礼)でもあると言えるのではないだろうか。

蛇はその外形から男性の性を象徴しているだけでなく、その生態から女性の性を象徴しているとも言われている。その生態とは、先に述べた脱皮である。

脱皮は古い身体を捨て去り、新しい身体を得るように見える。すなわち古い殻が持ち堪えられなくなったら、新しい殻を身に纏う。時至れば殻をつき破りつき破り生命を更新していく。そのため脱皮は、古代の人々からはめでたいものとして考えられた。

人間に脱皮は無い。脱皮に似た現象を人に求めればそれは女性における妊娠・出産である。女は自身の中に別の新しい生命を宿し、宿った生命は時が満てば母胎という殻の一種を破って外界に出る。そしてこれは親から子へと連綿と続くのである。

脱皮は生の再生である。新しく生まれ変わることである。妊娠・出産は自分自身が生まれ変わるわけではないが、新しい生命の誕生を意味している。蛇の脱皮はそれ一代を単位とするが、出産は世代

を単位とする脱皮と言え、その繰り返しは種族の維持を意味している。しかし、人は種族維持よりも自分自身の再生・永生をより切実に願うであろう。これは誰でも一度は望むことである。

『高野聖』の宗朝にとって、蛇は自己の心の中の性の邪悪な面を象徴すると同時に、それを跨ぎ越えることによって自分が意識している表側の思考に浮かんでこない性を統御し、変化させようとしている。性そのものを捨てようというのではない。性が無ければ種族維持は不可能である。性を蛇のように脱皮させることによって性を新しくし、性を上昇させる。つまり前に書いたように、性を浄化させるのである。

脱皮による再生――若返りは、水において「変若水」という形で表現されることになる。『高野聖』の女人は宗朝に言う。「私で苦労をいたしまして骨と皮ばかりに體が朽れましても、半日彼處につかって居りますと、水々しくなるのでございますよ。」（二十一）と。この水は宗朝を再生・浄化させるだけでなく、鳥獣を含めてありとあらゆる生命を蘇生させる若返りの水である。

水はすべての生命を溶解し死に導くと同時に、すべての生命を生み出し生を与える特質を持っている。つまりその身の中に生と死を互いに矛盾し、互いに呼応し合う特質を持っているのである。

出産は新たな生命の誕生であるが、見方を変えると胎児の死と言えるかもしれない。反対に羊水の中へ、母胎へ帰るということは、胎児の復活であると同時に人間の死であると言える。どちらにしても一度は死ななくてはならない。死という恐怖を通り過ぎてこそ、生という幸福が齎されるのかもしれない。胎児へ、生まれる以前へ、形のはっきりしない混沌とした生命体へと姿を変えるということは、再生の、新しく出ることの前提、新生のための条件と言える。水は一切の誕生・脱皮の媒体となる。

若返りは時間の立場から見ると過去へ戻ること、そしてそこから新たなる生をやり直す。つまり未来へ向って又歩き始めるのである。水は過去と未来を繋げ混合している。時を融合させる力は、さらには場所―世界の融合すら引き起こす。

宗朝は蛇に続いて蛭に襲われる。血を吸う大蛭の大群の落下は譬えようのない恐怖を引き起こし、「気が遠くなって、其時不思議な考へが起きた。」（八）。恐怖によって宗朝の持つ日常的な意識は一瞬にして崩壊し、秩序感覚が混乱し、一種の幻覚が生まれてくる。「凡そ人間が滅びるのは、地球の薄皮が破れて空から火が降るのでもなければ、大海が押被さるのでもない、飛騨国の樹林が蛭になるのが最初で、しまひには皆血と泥の中に筋の黒い蟲が泳ぐ。其が代がはりの世界であらうと、ぼんやり。」（九）。

ここでは宗朝の恐怖・錯乱から人間滅亡、すなわち世界の終末の幻想が現われてくる。時が一気に未来へと飛んでしまったのだ。時の流れが大きく変容し、世界そのものも分解すなわち滅亡してしまったのだ。そしてそこから更に進んで新しい世界が、「代がはりの世界」が登場する。この世界は古い存在がすべて消え去り、新しい存在が生み出される場所である。あらゆる生命が又一番最初から生み出されていくのである。生物の発展の一番最初、時の流れの一番

最初へ戻ってしまったのである。滅亡という未来から新生という過去へと時が一挙に変容し、世界が大きく変容した。

「代がはりの世界」になる。新しい世界が初まるということは、時の初めに戻ること、すべての生命が外界からの影響を受けず汚れを知らない無垢な状態である。ということである。若返りの力によって胎児に戻るということも、長い人生の中で身に付いた汚れが消え去り無垢な状態になるということかもしれない。水はすべての汚れを洗い流し、浄化する力を持っている。

民俗学者折口信夫氏によると、古代において禊ぎの儀式のための水は常世（黄泉の国）から来る特別な水であり、「常世から来るみづは、常の水より温いと信じられて居た」[注2]と言う。これは水が生命を生み育む羊水であり、母乳でもある優しく暖かい物質であるということから、こう考えられていたと言えるだろう。そうすると、宗朝が浴びた水は常世から来ていると考えられる。常世は黄泉の国であると同時に、不老不死の国であるとも考えられていた。つまり常世の水は人に不死を齎す水であるかもしれない。

不死になるということ。それは限りある生しか持てない人間にとって憧れである。不死たる者は人間より力のある尊い存在とされる。これも又一つの存在から新しい存在への変化である。

普通の人が持てない力を持つ。このためには人間を堕としめる人間の中の醜悪さ、不浄な部分を切り捨てなくてはならない。不浄を浄化し、更には聖化された存在にならなくては力は持てない。そのため禊ぎの儀式が必要となる。

禊ぎは穢れや不浄なものを洗い流すための儀式であるが、その反面来たるべきめでたい事、神聖な事のために予め身を清めるという意味もある。誕生もめでたい事の一つであるはずだ。宗朝の水浴の場合は禊ぎの儀式であると同時に、新しい存在――再生――の誕生の場面でもあるだろう。誕生の際、赤ん坊は産湯に漬かる。水は産湯を意味しているとも考えられる。

水は数多くの特質をその中に有している。死と恐怖、生と歓喜、消失と再生、若返りと浄化などありとあらゆる事象が水の中には包含されている。そこからは巨大な力が約束される。巨大な力は相矛盾しているもの、対立しているものすべてを融合し一緒にしてしまう。

水はあらゆる生命に死を約束すると同時に生を約束する。あらゆるものを崩壊させると同時に成生する。時を過去に戻すと同時に未来へと出発させる。世界の滅亡と同時に開始を見せる。水は互いの両極で対立している二つのものを溶解し混同し一つのものにし、対立を消去している。生命は死に分解し再び生き返る。ものは崩壊し混沌とした中から成生が開始せられる。時の終末は新たなる始源を約束する。一つの世界の終わりはもう一つの世界の始まりである。あらゆることが溶解し、境界線が隠れてしまう。日常と非日常、俗と聖という時間と空間は、その境界線が見えなくなってしまう。非現実的なことが現実的なものとして、遠くの出来事が身近の出来事として私達の前に現われてくることになる。

水は始原と終末を一緒に持っている。始まりがあれば終わりがあ

る。終わりが来れば始まりが又来る。それは大いなる循環である。水は循環する物質であり、あらゆる生命にとって根本的な生き方である。あらゆる有機的生命体は水から生まれて水へ帰って行く。生命の未生以前と死後は円環的に結ばれており、水はそれを繋ぐ原素であると考えられる。

水は終わりなき循環を果てしなく続けている。水は己れの内なる優しさ、暖かさから一つの生命を生み出し育む。そして生命に死という恐怖を与える。死に臨んで人の自意識や自己存在の不安定さを、水は無化し溶解し自己の中に同化させてしまう。と同時に疲労し汚れ埃の付いている生命を浄化し再生させる。この再生には浄化され生まれる以前の無垢な状態に戻るとともに、浄化によって以前とは違う「聖」化された存在となることの可能性も含まれている。

人は水に対してすべての存在を溶解させてしまう恐れとともに、存在を一番最初に、根源に戻すということに、無意識に強く魅せられる。根源復帰・母胎回帰は所詮不可能な夢であるが、人は一度はそれを夢見る。出生以前の始原に遡行しようという願望は、もしかしたら今の存在を消滅しようという、一種の死を願うことかもしれない。死とは究極的な静謐な眠りであるかもしれない。それはまだ生まれ出る前、母の胎内の中での安心した眠りに必適するものかもしれない。人は生を望むとともに死を望み、死を望むとともに生を望む。そこから輪廻の思想が生まれ、後の世での復活が望まれる。その願望を叶えるために、夢見ていたいために「水」を媒介として儀式は行なわれる。

「水」が媒介であるならば、それを使う人間がいるはずである。『高野聖』では山奥に住む美女がそれである。

水は禊ぎの儀式に使用するのに最適なものである。そして水は極めて女性的なイメージを持っている。バシュラール氏は、「水、特に小川は女性の裸形を喚起する。白く、若く、裸形の水浴びをしている女性の姿を。」[注3]と言った。それ故水を使った儀式に女性が関与することは少しもおかしくない。

古来禊ぎの儀式を助けたのは女性であった。すなわち、神事を司り、神に最も近い存在であったと言える「巫女」である。『高野聖』の女人は神事に関連する儀式――禊ぎの儀式を行なうという点において巫女的性格を持っていると思われる。

巫女は人間の中でも最も神に近い者として見られていた。穢れない無垢なる存在であり、一般の人々とは異なる存在でもあった。古代、台風などの天災は人々の理解を越えた現象であり、そのため神が怒りから起こしたものと考えられた。神の怒りを鎮めるためにあらゆる祭儀が行なわれ、古代の人々の生活の中で祭儀は重大な位置を占め、それ故巫女は、人々の上に大きな位置を占めていただろう。

人々の生活の上に巫女は大きな影響力を持ち、やがて必要以上に巫女のパーソナリティは神秘化・神格化され人々に崇拝されるようになっていった。

このようなことから巫女自身が神と同じように超自然現象を引き起こすことができると人々に信じられるようになるのは容易なこと

だったろう。すなわち単なる人間の女から、神と同じ不思議な力を持つ女へ、遂には巫女自体神と見られるようになっていってもおかしくない。

『高野聖』の女人もそうである。「柔かな掌が障ると第一番に次作兄いといふ若いのの（りゃうまちす）が全快」（二十六）と、普通の娘から病を癒す力を持つ女へと変化していき、その力は徐々に強大化していった。そして村を襲った洪水によって女人の人間としての生が終わった。

その後、遂には「年を経るに従うて神通自在ぢゃ、はじめは體を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果は間を隔てて居ても、道を迷うた旅人は嬢様が思ふまゝはッという呼吸で変ずる」（同）ようになった。病を癒すだけから、人間そのものを変身させる力を持つようになった。神同様の力である。女人自身遂に神となったのである。

神は人を超えた力故に人は崇拝と恐怖を与える。宗朝が女人と初めて会った時、女人は普通の女性と変わりがない。しかし時がたつにつれてその姿は大きく変容し、宗朝は心の底から女人を崇拝するようになる。

女人の宗朝に対する態度は、終始年上の美しい姉が弟に対するようであり、又は母親が小さい子供に対するようであると言える。それは「叔母さんが世話を焼く」（十四）ようなのである。女人のそばに集まってまとわり付く動物――蟇・蝙蝠・猿などに対しても同様である。猿の「天窓を振返りさまにくらはした」（十六）ような態度は、鳥獣達が真から憎くてした訳ではない。「其の悪戯に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしゃぎ過ぎると、若い母様には得てある図」（同）なのである。白痴に対してもそうである。食事の時老沢庵をねだる白痴に「婦人は熟と瞻って、／へまあ、可いぢゃないか。そんなものは何時でも食られます。今夜はお客様がありますよ。〉」（二十）と言うところは、まさに母親が駄々っ児をあやしている図である。このような女人の態度から受ける印象は優しく寛大な母親、つまり極めて母性的なのである。

女人が表側に出している態度は――特に宗朝には母性的なのである。時たまほんの一瞬母性的な印象が消え、もう一つの印象が表われる。「丈もすら〳〵と急に高くなったやうに見えた、婦人は目を据ゑ、口を結び、眉を開いて恍惚となった有様、愛嬌も嬌態も、世話らしい打解けた風は頓に失せて、神か、魔かと思はれる。」（十九）と、動こうとしない馬の正面に立った時、母親のイメージから一変してしまう。ここではまさに「神」か「魔」という人間を畏怖させる力を、その身に備わっている妖怪性を如実に表わしている。つまり魔物の姿が表われてくるのである。そして旅人を鳥獣に変えてしまう力は、女人の魔力を具体的に示している。

この一見矛盾しているような二つの印象、母と魔の姿、これは女人の中で何の矛盾も無く繋がり一体化し、表裏をなしている。そしてこの二つ、女人の持つ母性と魔性は又、神の持つ性格でもある。

女人は魔性の部分よりも母性の部分をより多く表側に出している。それ故、宗朝は女人に強く魅かれたのである。宗朝は女人のこ

とを「優しいなかに強みのある、気軽に見えても何處にか落着のある、馴々しくて犯し易からぬ品の可い、如何なることにもいざとなれば驚くに足らぬといふ身に應のある」（十七）と総評した。優しさと強さを併せ持ったこの印象は、若く美しい上品な母親のイメージによく合っている。が時にはどんなことでもやりかねない。という魔に通じる激しさを内に秘めているように思われる。このような性格の女人に宗朝は、「畏敬の念が生じて善か悪か、何の道命令されるやうに心得た」（同）のである。善きにつけ悪しきにつけその力を目の当たりにし、怖れ崇拝している。

鏡花は「鬼神力に対しては大なる畏れを有って居る。けれども一方観音力の絶大なる加護を信じる。[注4]」と言った。宗朝も女人の魔性を畏怖すると同時に、母性に熱烈な愛情を持っている。それは幼い子供の母親への思慕よりも更に強いものであり、生身の人間に対する愛というより偶像に対する、実体をはっきりと摑むことのできない美神に対する崇拝と言えるものである。

このような美神に対する熱烈な崇拝は、鏡花の亡き母への憧憬を背景としている。鏡花は幼い頃母親を失った。母親はその時二十八歳で、若く美しい母を失ったことは、鏡花に深い影響を残した。そしてその母の面影は年がたつにつれ鏡花の心の中で美化されていったことは容易に想像できる。

宗朝の女人に対する思いは、鏡花の思いをはっきりと投影している。亡母の面影から発した理想の女性は神の域にまで達している。そのためその思慕は、自己と同一の地平線に生きている生身の女性に対する思慕と一線を画すこととなる。

宗朝が一泊した翌日、孤屋へ戻ろうかどうしようかと迷った時、「汚らはしい欲のあればこそ恁うなった上に躊躇するわ」（二十五）と思う。この「汚らはしい欲」、つまり肉欲を、生身の女に対するドロドロとした欲情を、理想の美神像に抱いてはならないのである。偶像を抱く訳にはいかない。しかもその偶像の原点は母親なのである。すなわち母親を肉欲の対象と見ることは禁忌（タブー）を犯すことであり、人が避けなくてはならないことである。もしその禁―近親相姦を犯したならば、その人は厳しい罰を受けなくてはならない。

富山の薬売りはおそらく女人を崇めたりしなかったのだろう。「旅籠屋の女のふとった膝へ脛を上げよう」（三）という気持で女人に接したのだろう。それ故薬売りは馬に変身したのである。普通の女性に対して持つ欲情でもって神に臨んだ者への厳罰がこれである。馬の他にも牛・猿・蟇・蝙蝠など変身させられた者もいるが、これらも同様であろう。禁忌（タブー）を犯した者に対して女人はその力を「鬼神力」として、魔神として人々の目の前へ現わすのである。男達にその本性に相応しい姿を、人間としての生を奪い、鳥獣としての生を与えるのである。反対に、宗朝のように神への愛と生身の女への愛に一線を画し、神に純粋な崇拝を捧げた場合は、つまり「感心に志が堅固」（二十五）であるから「嬢様別してのお情」（二十六）を受け、女人の力が「観音力」として現われ、宗朝は救済されて山を下りることができたのである。

女人と対照的な存在は白痴である。宗朝が山奥の孤屋に辿り着いた時、一番最初に出会ったのが白痴である。その姿は「ちゃん〳〵を着て、胸のあたりで紐で結へたが、一ッ身のものを着たやうに出ッ腹の太り肉、太鼓を張ったくらゐに、すべ〳〵とふくれて然も出臍といふ奴、南瓜の帯ほどな異形な者を片手でいぢくりながら幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり。」（十）というかなり醜悪なイメージで描かれている。この白痴が女人の夫である。

女人の白痴に対する態度は、夫に対する妻のそれではなく、子に対する母のそれである。白痴は女人の夫であると同時に子供であるかもしれない。この白痴に鏡花の亡母を原点とする聖母への渇望が示されているのかもしれない。しかし子供が母親の夫になるということは、近親相姦、つまり禁忌（タブー）を犯すことであり、否定されるべきことである。白痴が「唖か、白痴か、これから蛙にならうとするやうな」（同）姿で、醜悪で否定的な存在として描かれているのは、近親相姦に対する禁忌が潜在的に働いているからとも考えられる。

夜の食事の後、白痴は女人に言われて「木曽節」を歌う。それは「清らかな涼しい声」（二十二）であり、「前の世の比白痴の身が、冥土から管で其のふくれた腹へ通はして寄越すほどに聞こえ」（二十二）たのである。この「前の世」とは白痴がまだ生まれる前の世界であり、宗朝自身の生まれる前の世界でもあるかもしれない。前田愛氏は宗朝にとって白痴は「未生以前の自分の姿」[注5]であるとした。未生以前ということは母の胎内にまだいる時点、胎児の段階と言えるだろう。そのことは「南瓜の帯ほどな異形な者」（十）とした臍を、胎児と母親を繋ぐ臍の緒の表象と推測すれば充分頷ける。白痴は子供から更に胎児の姿を象徴している。

女人は女神として大森林の奥に君臨している。谷川の水を司り、邪しまな心を持った男達に対してその神の力を魔性のものとして、男達に破滅を与えるのである。

谷川の水は鳥獣を含めたあらゆるものに生命を与え若返らせる「変若水」である。女人はその水の精とも言える存在であり、あらゆる生産に結びつく性を強く感じさせる。「ひたと附ついて居る婦人の身體で、私は花びらの中へ包まれた」（十五）気分に宗朝はなる。「花びらの中」へ、それは外界の脅威から守られ、暖かく優しい母胎の中へ包まれているようなものである。宗朝が女人のことを「白桃の花」（十六）としたのも、母胎のイメージから母を、そして生産と再生を思い起こさせるからだろう。

宗朝は水の精であり、母神でもある女人によって行われる「禊ぎの儀式」そして「再生の儀式」を受ける。そしてそこには単なる再生から身体、精神が昇華され、再生以前の自分とはまるで違う「聖なる存在」に生まれ変わるかもしれない。

『高野聖』では、蛇・水・女人が一つに繋がり一体化し、「死と再生」という巨大な儀式を行っている。人は生きている限り、その外見が、その精神が変化していく。変化の中の一つの節目として儀礼が存在する。所謂、「通過儀礼」である。

民俗学者井之口章次氏は、「個人がその生涯の成長衰退の過程の

中で、必ず通過し、または通過させられる諸儀礼を、人生儀礼、生涯儀礼、通過儀礼など[注6]」と言うとした。「死と再生」は通過儀礼の中で最大のものと言えるだろう。

『高野聖』の場合、肉体そのものより、精神及び性の更新に比重が置かれているように思われる。女人を崇拝することのできた宗朝は、浄化されて山を下りた。その反面、女人を情欲の対象と見た男達は、鳥獣に変化した。見方を変えれば、儀礼を尊重したか、しなかったかの差とも言えるかもしれない。どちらにしても与えられる再生が、常に祝福の方向だけに向いているとは限らない。

そして「死と再生」の儀礼には、「性」が強く感じられる。妊娠・出産には性が必ず伴い、そして必要である。事実、『高野聖』に出てくる禁忌（タブー）とされているものはどれも皆、性と関わり合いがある。蛇・水・女人も性を強く感じさせる。特に、女人が魔性の部分を表に出した時がそうである。「生ぬるい風のやうな気勢がすると思ふと、左の肩から片膚を脱いだが、右の手を脱して、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着て居た其の単衣を圓げて持ち、霞も絡はぬ姿はなった。（中略）兎は躍って、仰向けざまに身を翻し、妖気を籠めて朦朧とした月あかりに、前足の間に膚が挟ったと思ふと、衣を脱して掻取りながら下腹を衝と潜って抜けて出た。」（十九）。ここは性を、強いエロティシズムを感じさせる場面である。人間存在の根源である生と死のための儀礼であるならば、そこに性が感じられるのは当然だろう。そしてそこには必ず禁忌（タブー）が伴っている。何事にしてもしてはならないことは必ずある。

「死と再生」の儀礼には性が強く関わっていると同時に、「浄化」及び「聖化」の問題が必ず伴う。ただ再生するだけでは駄目なのである。そこには以前の自分よりは昇華された自分、つまり身に付いた汚れや罪を洗い流した、「浄化」された自分でなくてはならないのである。更に、浄化され穢れを落とし無垢な状態となり、周囲の人々よりも昇華された存在に、神聖な存在に、つまり「聖化」された自分を見出すことを、人は希求するのである。

『高野聖』最後の場面、宗朝と話しの聞き手である「私」が別れる場面で宗朝の姿は、「ちらちらと雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、恰も雲に駕して行くやうに見えたのである。」（二十六）と書かれている。ここでは、宗朝は女人を祭司として、「俗」から「聖」に浄化され、更に話の聞き手である「私」自身が、宗朝の語りによって浄化されたのだという論がある[注7]。

宗朝は実際水を浴びて再生し、「私」は間接的に儀礼を受け再生し、聖化された存在になったと言える。しかし、その聖化は果たして完全な聖化であったであろうか。宗朝は、「僧侶よりは世の中の宗匠といふものに、其よりも寧ろ俗歟。」（一）と、儀礼が終了した後も、なお俗なところをその身に残している。「私」にしても、実際に女人と会わず、水による「死と再生」の儀式を受けていない「私」がどこまで浄化され聖化したか、甚だ曖昧である。

儀礼の中には「禊ぎ」の儀式があり、それは水の洗礼によって身の穢れを洗い流すことを目的としている。『高野聖』の水浴の場面を「禊ぎ」の儀式として見れば、宗朝が身心の不浄を浄化されたこ

とは間違いない。問題なのは一体どの程度まで浄化されたか。ということである。本当に聖なる存在にまで浄化されたか。ということである。

水という巨大な力によって「死と再生」の儀礼は、実行されるのである。そして通過儀礼は誰もが必ず通過しなくてはならない儀礼であり、人生の次の段階へ進むための重要なポイントである。そしてより完全な浄化のため繰り返し行なわれなくてはならない。『高野聖』の女人は、谷川の水ある限りいつまでも若く美しく、そして旅人は繰り返し現われるだろう。「死と再生」の儀式は永遠に繰り返されるのである。

儀礼が繊り返されるならば、第二、第三の『高野聖』は必ず現われることになる。物語は永遠に繰り返され、終わりなき物語と化す。物語が繰り返され、人々の間に伝わり、親から子へと伝わりながら、物語は普遍化され伝説・伝承へと変化していく。

水は生から死、そして再生というパターンを古代から繰り返し続けてきた。それは終わりなき繰り返しであり、一つが始まると一つが終わり、又始まりに戻るという循環を繰り返している。つまり円環的な存在なのである。過去と未来が一つに繋がるということは、永遠に終わりの無い円の世界である。

一人の人間が生・死・再生というパターンを繰り返し行っているとする。これは誰もが行うことができる可能性を持っている。一人から二人へ、更には何十人、何百人となり、遂には人間という種族全体が、この繰り返しをやっていると言えることになる。人間は常に繰り返し生き、死に、又生きるのである。そして人間は永遠に再生を続けて世界の終末へと、過去へ繋がる未来へと進んで行くのである。これはまさに「輪廻」である。

「輪廻」という言葉は、仏教から来たものであり、仏教の重要な概念である。輪廻は、生死・転生・流転などとも言い、車輪が回転して止まることが無いように、人間が煩悩と業によって、迷いの世界、すなわち三界（欲界・色界・無色界）、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）に、生まれ変わり死に変わって果てしが無いことを言う。そしてこの輪廻から脱することが、解脱で、その境地が涅槃とされる。

この解説・涅槃は、浄化・聖化に対応する言葉と言える。輪廻からの脱出とは人の世の苦しみから脱し、疲労や汚れなどと無縁の存在となることである。それは自分自身を昇華し、聖なる存在になることである。しかもその聖化は、更に聖化される余地を残している不完全で、中途半端な聖化ではない。完全に聖化され、これ以上聖化されようが無いという状態、至高の存在である。言い換えれば、神の段階に達したのである。

鏡花は、この「輪廻」の一断面を繰り返し書き続けた作家と言える。

近代小説の主要なモチーフとなっている「自我」という問題よりも、遥かに巨大で、人間という種族の存在そのものに根ざす問題を捉えていたと言える。「自我」を問題とした小説が書かれるようになったのは、明治時代以降西欧の近代思想が日本に流入した時から

である。従って「自我」を表現している小説は西洋近代思想の影響が強い小説なのである。とすると、「死と再生」という輪廻思想を根底としている鏡花の小説は、極めて日本的だと言えるだろう。

「代がはりの世界」、「死と再生」という思想は、古代から続く極めて日本的な伝説・伝承である。明治以降の近代は、このような伝説・伝承の類が受け入れられる余地はなかった。西欧の近代思想は日本の古代から続く伝説を駆逐し、その領域を大きく侵犯していった。

生命を再生させる水を自由に操る女人は、すべての生命を生み出す地母神と言えるだろう。日本の伝説の中に属する女人の、魔神としての力は、侵犯された地母神の近代に対する復讐と見ることもできる。

『高野聖』の宗朝は、夏の一昼夜で「死と再生」という巨大な循環を果たした。これは鏡花自身の願望であるはずだ。そして鏡花の『高野聖』をはじめとする多くの作品は、鏡花の心の奥底に存在する、鏡花の伝説・伝承の物語であり、浄化・聖化された存在への憧れと夢を鏡花の言葉で描いたものである。

（注）

1　ガストン・バシュラール『水と夢―物質の想像力についての試論』（一九六九年八月十日、初版、国文社刊）第五章『母性の水と女性の水』　一七二頁。

2　「折口信夫全集」（第二巻、昭和五十年十月十日、初版、折口博士記念古代研究所編集・中央公論社刊）所収の『水の女』一〇三頁。

3　ガストン・バシュラール『水と夢―物質の想像力についての試論』（一九六九年八月十日、初版、国文社刊）第一章『明るい水、春の水と流れる水。ナルシシスムの客観的条件。愛する水』　五八頁。

4　泉鏡花　談話『お化け好きの謂れ少々と処女作』（明治四十年五月「新潮」に発表。）

5　「泉鏡花　文学研究資料叢書」昭和五十五年六月、初版、日本文学研究資料刊行会編集・有精堂刊）所収の前田愛『泉鏡花「高野聖」―旅人のものがたり』　一三九頁。

6　『講座　日本の民俗三　人生儀礼』（昭和五十三年、初版、井之口章次編集・有精堂刊）第一章概略　一頁。

7　「泉鏡花　文学研究資料叢書」（昭和五十五年六月、初版、日本文学研究資料刊行会編集・有精堂刊）所収の東郷克美『「高野聖」の水中夢』　一五〇頁。